早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　30号―1　二〇二二年九月

『新撰万葉集』「蕭郎」考

倪　晨

一、はじめに

『新撰万葉集』[1]は上下二巻から成り、九世紀末に行われた「寛平御時后宮歌合」や「是貞親王家歌合」等、主として歌合の歌を選び四季と恋の五つの部によって編集した私撰歌集である。寛平五年（八九三）の成立、延喜十三年（九一三）の増補とされ、和歌史上、八世紀後半に成立した『万葉集』と十世紀初頭の『古今和歌集』のかけ橋的な歌集と見なされている。和歌が真名書きされているほか、所収の和歌すべてに七言絶句の漢詩一首が配されている点も、この歌集の際だった特徴といってよい。漢詩の作者については、菅原道真（八四五～九〇三）とする説もあるが、未だ定論を見ていない。しかし、この歌集こそは九世紀末日本における和漢の競演というに相応しい内実を備えている。

『新撰万葉集』において具体的に表現される和漢の競演は、短歌と七絶という短詩型によるものである。短歌三十一文字、対する七絶は二十八文字、ほぼ同字数の詩型ではあるが、片や真仮名（万葉仮名）、つまり漢字の表音機能のみを用いた漢字表記、片や表意・表音の両方の機能をフルに用いる真名表記という相違があり、一首の情報量は大きく異なり、七絶の方が短歌より情報量がはるかに多い。

先行研究によってすでに明らかにされているように、一組の短歌と七絶は内容的にはほぼ同一の意境を共有している。しかし、そうとは言え、短歌と七絶とでは、畢竟、表現の形式も方法も、さらにはそこに息づく伝統も大きく異なる。つまり、短歌を直訳的に漢字表現に改めれば漢詩になるわけではなく、その逆もまた然りである。和歌は和歌らしく、漢詩は漢詩らしく作られてこそ、はじめて評価の俎上に乗せられるのである。このような観点から、筆者は主として『新撰万葉集』の漢詩に着目し、漢詩の作者が日中二つの詩型の決して小さくはない異同を如何に乗り越えて一首を構成したのか、という創意工夫に着眼して、個別表現に即して具体的に考察を進めている。

本稿では、その一環として、「蕭郎」という詩語に着目する。この

詩語は四首の七絶に現れる。それぞれに対応する短歌には、「蕭郎」はおろか「蕭」も「郎」の字もまったく含まれていない。この事実を手がかりとして、『新撰万葉集』所収漢詩の特質の一端を明らかにしたい。なお、本稿では、『新撰万葉集』所収の和歌を〈歌〉、漢詩を〈詩〉と略称する。

二、『新撰万葉集』にみえる四首の「蕭郎」

和歌と漢詩との形式がもたらす両者の質的異同はけっして小さくない。数文字によって一語を構成する和語と一字一義を原則とする漢語とでは、一首の情報量がまったく異なる。漢詩には見えるが、和歌にはない情報には、〈詩〉の作者が自由に遊ぶことのできる空想の世界、「あや」の世界がある。[2] その「あや」の世界を究明するために、まず『新撰万葉集』にみえる四首の「蕭郎」に着目することとする。

（ア）巻上【夏歌第二十】（通算四十一番）

誰里丹夜避緒為手鹿郭公鳥只於是霜寢垂音為

（たが里に夜離れをしてかほととぎすただここにしも寝たる声する）

郭公本自意浮華　（郭公　本自意浮華なり）

四遠無栖汝最奢　（四遠栖無くして　汝最も奢れり）

性似蕭郎令女怨　（性は蕭郎に似て　女をして怨ましめ）

操如蕩子尚迷他　（操は蕩子の如く　尚他に迷ふ）

〈歌〉では渡り鳴くほととぎすが主役となっている。上の「たが里に夜離れをしてか」と、下にある「ただここにしも寝たる声する」はほととぎすの住処をひとところに定めない特徴を捉えている。

〈歌〉がほととぎすの鳴き声に意味を付与する一方、〈詩〉の前二句ではほととぎすに付与された、住処をひとところに定めないという行動上の特徴を「意浮華」、「四遠無栖」、「奢」という表現で直接形容している。軽薄で派手好きで、あちこち浮かれて飛び廻る、ほととぎすのイメージが強調されている。ここから空想が広がり、第三句に女に怨みの情を抱かせる「蕭郎」、第四句に他所の女に心を迷わせている「蕩子」が描かれる。ここで、「蕭郎」と「蕩子」が一対になり、ほととぎすは浮気性の男に擬人化される一方、女性視点の描写に変わり、閨怨的な雰囲気が前面に現れ出ている。

（ア）の作品は明らかに恋を詠っているが、渡り鳥であるほととぎすが初夏の五月に渡来するので、夏の歌に置かれたのであろう。

（イ）巻上【秋歌第十八】（通算六十番）

秋山丹戀為麋之音立手鳴曾可為岐君歟不來夜者

（秋山に恋する鹿の声たててなきぞしぬべき君が来ぬ夜は）

獨臥多年婦意睽　（独り臥すこと多年　婦意に睽けり）

秋閨帳裏擧音啼　（秋閨の帳裏　音を挙げて啼く）

生前不幸希恩愛　（生前不幸にして　恩愛希なり）

願敎蕭郎抂馬蹄　（願はくは蕭郎をして　馬蹄を抂げしめんこと）

〈歌〉では、鹿が秋の山で伴侶を求め、声を振り絞って鳴くと詠まれている。その鳴き声を「なきぞしぬべき」で、愛しい人の来ぬ秋

の夜の閨の悲しみと、鹿の声がしきりに心を掻き立てることを強調する。

〈詩〉は〈歌〉の「なきぞしぬべき」と声たててなく鹿や、「君が来ぬ夜」などの表現に着目して、全面的に閨怨詩として展開する。〈詩〉の起句は長年一人で夜を過ごす女性を描出し、全詩の基調が閨怨であることを明示している。承句は女性が閨で悲しみ泣く様子を描くことで、歌の「声たててなきぞしぬべき」と対応させている。下の二句は、生きている間、不幸にして、愛されることが稀であったので、蕭郎の君よ、私の所に馬を向けてお越しくださいと願望を述べる。転句は起句の「婦意睽」と相呼応している。夫と幸せな生活を送りたいが、その願いがなかなか叶えられない。結句は転句から生まれる願望を詠み、因果関係をなす。しかも下二句は和歌においての「君が来ぬ夜は」と関連している。「君」が不在であるので、愛されることが稀であった。それゆえに、何としても、蕭郎の君に帰ってきてほしい、と切実な思いを絞り出すように吐露するのである

（イ）の作品も（ア）と同様、秋の風物である鹿を歌っているので、内容面からみれば恋歌と見なせる歌を秋の歌に帰属させている。

（ウ）巻上【恋歌第十】（通算百九番）

被厭手今者限砥成西緒更昔之被戀鉋

（厭はれて今は限りと成りにしを更に昔の恋ひらるるかな）

被厭蕭郎永守貞　（蕭郎に厭はれて　永く貞を守り）

獨居獨寝涙零零　（独居独寝（どっきょどくしん）　涙零零（れいれい）たり）

心中昔事雖忘却　（心中の昔事忘却（せきじぼうきゃく）すと雖も）

顧念閨房恩愛情　（顧念す　閨房恩愛の情）

〈歌〉では「今」と「昔」の対比を用いて、すでに終わった恋を思い描いている。恋が終わった原因は相手に「厭われ」たことにある。今、愛する人に飽きられて、恋が終わったが、未練がましく仲睦まじかった昔の恋情を偲んでいる。

〈詩〉の起句にみられる「蕭郎」は（ア）と同様、女性が思いを寄せる愛しい人であり、かつまた浮気性で己の所に留まってくれない人を指す。その「蕭郎」に飽きられながら、一人で閨で貞淑に寂しく過ごし、涙がとめどなく流れ落ちる。昔の事を忘れてしまったとはいっても、未練がましく思うのは閨房でのあの人のやさしさである。

〈詩〉は〈歌〉における昔のゆかしき想い出を「閨房恩愛情」に絞って閨怨詩の雰囲気を色濃く漂わせている。そして、〈歌〉において明示されてはいない恋の対象を、具体的に「蕭郎」と明示している。しかも、起句の「被厭」によって、「蕭郎」が心変わりしたことが暗示されている。起句と結句の表現は〈歌〉と関連しているが、承句と転句は詩人によって新たに付加された空想の世界といってよいものである。

（エ）巻上【恋歌第十三】（通算百十二番）

片絲丹貫玉之緒緒弱美紊手戀者人哉知南

（片糸に貫く玉の緒を弱み紊れて恋ひば人や知りなむ）

誰識中心戀緒纁　（誰か識らむ　中心恋緒纁（れんちょくん）たり）

卞和泣處玉紛紛　（卞和泣く処　玉紛紛たり）
千般歎息員難計　（千般の歎息　員計へ難し）
爭使蕭郎一處羣　（爭でか蕭郎をして　一処に群まらしめむ）

〈歌〉では弱い糸で貫きとめた玉が散らばるような、心を乱す恋が詠われている。「片糸」は一本の繊維を表す。本来糸は二本の繊維を撚り合わせるものである。この〈歌〉では、「片糸」を素材とするので、それを受けて「緒を弱み」と詠む。糸が弱くてちぎれそうなので、そのような糸に貫かれた玉が乱れ散っても無理はない。歌人の心もその玉のように、乱れている。

〈詩〉の起句は「片糸」のようにはかなく続く忍ぶ恋を描き、承句は歌の「玉」を受けて、「卞和」と「玉」の故事を用いて、前半の二句でほぼ歌意を尽くす。「卞和」の故事から、後半の二句が聯想されるという構造を持ち、この聯想こそが詩人の空想の世界である。

「卞和」は『韓非子』「和氏」篇を出典とし、『蒙求』にも「卞和泣玉（卞和　玉に泣く）」の標題で収載される。卞和が王に再三、玉の原石を献上しても王に理解されなかった無念がおそらく転句「千般歎息員難計」の恋の嘆きとつながっている。思いを受けとめられず、何度も悲嘆にくれたが、それでもどうしても「蕭郎」と「一處」で会いたい。女が「一處」を求めるひたむきな思いが表出される。この愛する人と一緒にいたい気持ちは（イ）の結句と相通じている。

以上のように、『新撰万葉集』に描かれた「蕭郎」には二つのパターンが見いだせる。一つは、（ア）（ウ）にみえるような、女性を捨てた浮気な男としての「蕭郎」である。二つ目は、（イ）（エ）のような、女性と離れたが、自分を訪ねてきてほしいと女性に強く懇願される対象としての「蕭郎」である。

三、中国古典詩語としての「蕭郎」の諸相

各種データベースを検索したところ、「蕭郎」は唐に至って初めて用いられるようになった詩語であることが分かる。唐詩における「蕭郎」の用例を分類すると、まず「蕭姓の男性」という意味合いで用いられているものがある。たとえば、次の白居易の例がそれである。

中唐の白居易（七七二～八四六）は「憶杭州梅花因叙舊遊寄蕭協律」（『白氏文集』巻五十三の二三八八）において、「歌伴酒徒零散盡、唯殘頭白老蕭郎（歌伴　酒徒　零散し尽き、唯だ残る頭白の老蕭郎）」と詠み、「畫竹歌」（『白氏文集』巻十二の五九四）において、「蕭郎下筆獨逼真、丹青以來唯一人（蕭郎　筆を下して独り真に逼り、丹青以来唯だ一人）」、「蕭郎蕭郎老可惜、手顫眼昏頭雪色（蕭郎　蕭郎老ひて惜しむべし、手顫へ眼昏らみて頭　雪色なりき）」と三回に亘って「蕭郎」を用いている。蕭協律は友人の蕭悦を指す。蕭悦は画を描くのが巧みで、歌舞や花を愛でる風流人であった。白居易の詩に見える「蕭郎」は、あたかも梁の武帝蕭衍のように、蕭を姓に持ち、華やかな宴席を好み、絵筆を揮い、風流を好む文人をイメージさせる。(3)

同じく中唐の詩人で白居易より年長の楊巨源（七五五～?）は

「臨レ水看レ花」（『全唐詩』巻三百三十三）において、「今朝幾許風吹落、聞道蕭郎最惜多（今朝幾許か風吹き落とさん、聞道らく蕭郎最も惜しむこと多しと）」と詠み、白居易の詩と同類の、花を惜しむ風流な「蕭郎」が詠じられていた。また、やはり中唐の詩人で、おそらく白居易より年長の崔郊（生卒年未詳）の「贈二去婢一」（『全唐詩』巻五百五）では「侯門一入深如海、従此蕭郎是路人（侯門一たび入れば深きこと海の如し、此より蕭郎　是れ　路人なり）」というように、花を愛惜するところから転じて、女性と相思相愛の男性を指す「蕭郎」が用いられている。

晩唐になると、「蕭郎」の用法に変容が見られる。温庭筠（八一二？～八七〇？）の「哭二王元裕一」（『温庭筠集』巻四）に「聞説蕭郎逐逝川、伯牙因此絶清弦（聞説らく蕭郎　逝川を逐ひて、伯牙此に因りて清弦を絶つ）」とあり、「蕭郎」と「伯牙」の対が現れる。この「蕭郎」は友人の王元裕を指し、「蕭」という姓を離れて、王姓の人物の形容として用いられたことが確認できる。この二句は『呂氏春秋』や『列子』所載の「伯牙絶絃」（もしくは「知音」）の故事を踏まえるが、琴の名手伯牙の奏でる音を聞き分けた「知音」は鍾子期であり、「蕭郎」ではない。この改変はおそらく簫の名手で昇仙した蕭史の神仙的イメージを王元裕に重ね合わせるためにしたものであろう。というのも、この詩句の三句後に「篋里詩書疑謝後、夢中風貌似潘前（篋里の詩書　謝の後なるかと疑ひ、夢中の風貌　潘の前なるに似たり）」の二句があり、文才はまるで劉宋の謝霊運の後裔ではないかと見紛うほどの素晴らしさ、風貌は潘岳より前に列せられるくらいの美貌であると、今は亡き友王元裕を絶賛しているからである。

温庭筠にはこの他にも、「贈二知音一」（『温庭筠集』巻四）という詩の中に、「窓間謝女青蛾斂、門外蕭郎白馬嘶（窓の間　謝女　青蛾を斂め、門の外　蕭郎　白馬嘶く）」という対句があり、「謝女」との対で「蕭郎」が用いられている。「謝女」とは六朝晋の詩人謝道蘊を指す。降り出した雪を柳絮に喩えた故事は、『世説新語』や『晋書』にも収録され、とりわけ著名である。ここでは、広く才媛・才女を象徴する。よって、その対になる「蕭郎」も蕭姓の誰かを指すわけではなく、広く風流な才子を指すと見なすのが適当であろう。ただし、「蕭郎」と「謝女」との対には、おそらくその背後に「蕭史」と「弄玉」の伝説的イメージが込められていると思われる。その伝説とは、劉向『列仙伝』巻上に見えるもので、秦の穆公が簫を上手に奏でる娘の弄玉を簫の名手蕭史に娶らせ、二人は簫をひたすら練習するうち、鳳凰の鳴き声と同じ音色を出せるようになった。すると天界から鳳凰が舞い降り楼台に留まるようになり、さらに練習を重ねると、天より迎えが降臨し、弄玉は鳳凰に乗り、蕭史は龍に跨がり、昇天したという故事である。さらにいえば、「蕭郎」と「白馬」の組み合わせから、諸王から皇帝となった梁武帝蕭衍のイメージも重ねられているように感じられる。

かくて、詩語「蕭郎」には、蕭姓の男子に限定されず、広く一般的に、書画、音楽、詩文に長じ、風流を解し、眉目秀麗なる才子、とい

うイメージが付与されている、と考えられる。

一方、「蕭郎」には武の側面を捉えた用例も存在する。敦煌文書の「敦煌曲子」「宮怨春 到二邊庭一」（『敦煌歌辞総編』巻二の三二六）に「焚香稽首表君情、慕得蕭郎好武。累歳長征、向沙場里（香を焚きて稽首して君の情を表し、慕ひ得たり蕭郎の武を好むを。歳を累ねて長征し、沙場の里に向り）」とあり、戦場に赴く兵士としての「蕭郎」が描かれている。

以上のように、唐の後半期に入り、文武それぞれの「蕭郎」像が築かれている。風雅な文人の側面と、戦争に赴く武人の側面の両方を兼ねた蕭姓の歴史人物は、梁の武帝「蕭衍」であるので、「蕭郎」のモデルの源泉として蕭衍の存在があることをここで指摘しておきたい。かつまた、「蕭郎」に相応しい女性の存在や、「蕭郎」が音楽に長ずるところは、秦穆公の娘弄玉と夫婦となり、揃って天へと昇った簫の名手「蕭史」への連想を容易にする。

女性の視点から詠んだ恋情に焦点を絞るなら、次のような用例が目に留まる。

唐の上元夫人の「留別」に「蕭郎不顧鳳樓人、雲澀回車淚臉新（蕭郎　鳳楼の人を顧みず、雲渋りて車を回らせば涙臉新たなり）とあり、「與二蕭曠一冥會詩」其二「織綃詩」に「織綃泉底少歡娛、更勸蕭郎盡酒壺（織綃　泉底　歡娛少なし、更に蕭郎に勧めて酒壺を尽くさしむ）」とある。[4] 二首は共に『太平広記』にも収録され、女主人公は仙女であり、男主人公は「蕭郎」である。[5] 故事において、男女はそもそも恋愛関係にあるのではない。最後、去りゆくのは仙女、地上に取り残されたのは「蕭郎」である。

中国の古典世界において、「蕭郎」は仙女をはじめ様々な女性に好まれたが、浮気性で薄情な「蕭郎」は、管見の限りでは、用例を見出せなかった。[6]

四、「蕭郎」と浮かれ男

前節において、唐詩における用例を概観したが、唐詩には「蕭郎」を浮かれ男として用いた例は存在しなかった。しかし、『新撰万葉集』（ア）の〈詩〉においては、起句に「意浮華」とあり、「蕭郎」は他所の女に心を迷わせる「蕩子」の対として用いられている。この「蕭郎」は、唐詩に見える、女性が慕情を寄せる颯爽とした男性という好ましいイメージを受け継ぎつつも、その魅力は当該女性一人に止まらず、他の女性をも魅惑するところとなり、かえって彼女を孤独に追いやる、薄情な存在と化したことがわかる。

小島憲之は『古今集以前』において平安人の描く「蕭郎」には伝説の簫の名手「蕭史」の典故が秘められていると指摘した上で、「『新撰万葉集』の恋の詩に、『蕭郎』が蕩夫として出現するのは、女性を悲劇とする当世的な心情に原因がある。嘗ては、馬蹄の音もとどろに訪れて来た情夫蕭郎はもはや来ない」[8]と「蕭郎」が「蕩夫」に変容した原因に言及している。[7]

この訪れぬ「蕩子」に対して、『新撰万葉集注釈』では「梁の江淹『征

怨詩』に『蕩子従征久、鳳樓簫管閑（蕩子　征に従ひて久くして、鳳樓　簫管閑かなり）』とあり、『蕩子』と『蕭郎』とが関連する。こうした例から、『蕭史』あるいは『蕭郎』を『蕩子』と見ることは平安朝独自の発想ではなく、すでに中国の梁代にまで遡ることも考えられる[9]」とコメントしている。

「征怨」（『江文通集』補遺）は夫が出征して、取り残された妻が帰らぬ夫の帰りを待ちわびる情を詠じた作品である。

蕩子従征久　（蕩子　征に従ひて久くして）
鳳樓簫管閑　（鳳樓　簫管閑かなり）
何日邊塵淨　（何れの日か　辺塵浄くして）
庭前征馬還　（庭前に征馬還らんや）

愛する人「蕩子」が戦争に赴いて久しくなり、家に簫や管などの楽器の音色が聞こえなくなったが、いつになったら、辺境にある戦争が終わり、愛する人が馬で家に帰るのであろうか、と。

承句の「鳳樓」や「簫管」の語から、前述の蕭史の伝説やイメージが喚起される。と同時に、「閑」の字から、かつて夫が出征する前、二人は簫や管などの楽器を奏で仲睦まじく過ごしていたことが読み取れる。また起句の「従征」や転句の「邊塵」から、女性の愛する人が戦争に出かけたことがわかる。「庭前征馬還」の「征馬」から、「蕩子」が馬に騎乗して家に帰還することがわかる。

女性の夫は、家にいる場合、「蕭史」をイメージさせる「蕭郎」的な存在であり、不在の場合、「蕩子」と見なされている。さらに、「馬」が「蕭郎」と「蕩子」とをつなぐ存在として機能していることは注意されてよい。結句に詠じられた馬に騎乗して家に帰還する表現は、「蕭郎」の立身出世の面を強調し、軍功を収めることを暗示している。

「征怨」に見える簫の名手蕭史に関する詠出は、（ア）において「蕭郎」と「蕩子」が対をなす蓋然性を示唆している。

この浮かれ男へと変貌した「蕭郎」を考察する際には、「蕭郎」の対語となる「蕩子」の表現の検討が、有力な手掛かりとなるであろう。ここで、「蕩子」の他の用例についても検討したい。

南北朝・邵陵王蕭綸の「代二秋胡婦一閨怨詩」（『玉台新詠』巻七）に

蕩子従遊宦　（蕩子　遊宦に従ひ）
思妾守房櫳　（思妾　房櫳を守る）
塵鏡朝朝掩　（塵鏡朝朝掩ひ）
寒牀夜夜空　（寒床夜夜空し）
若非新有悅　（若し新に悅ぶもの有るに非ずんば）
何事久西東　（何事ぞ久しく西東するや）
知人相憶否　（人の相憶ふを知るや否や）
淚盡夢啼中　（涙は尽く夢啼の中）

とある。詩題にいう「秋胡」は『列女伝』「節義」に「魯秋潔婦」と題して収められる故事に登場する人物である。「秋胡」は春秋時代魯の人、結婚して五日後、仕官のため陳に旅立った。五年後ようやく家に帰り、道の傍らで桑を採る美人を見た。美人を得るために金を贈ったが、拒絶された。家に着いて、戯れた美人が自分の妻であることに

気付いた。妻は、秋胡が夫婦の節義を棄てたことを訴え、潔く河に身を投げた。後、「秋胡」は道徳・節義にもとる男を表すようになった。

本文の頸聯は、もし好きな女でも新しくできたのでなければ、こんなに長々と離ればなれになるわけはないと詠んでいる。「従遊宦」の語から、この「蕩子」が他国に仕官に出かけたことがわかる。しかも、仕官地で好きな女が新たにでき、心変わりした可能性が高い。

右の詩のほかに、南北朝の蕭綱には、

「聖製楽府三首」其三「妾薄命十韻」（『玉台新詠』巻七）

名都多麗質　（名都には麗質多し）
本自恃容姿　（本自ら容姿を恃む）
蕩子行未至　（蕩子行きて未だ至らず）
秋胡無定期　（秋胡　期を定むる無し）
玉貌歇紅臉　（玉貌紅臉に歇み）
長顰串翠眉　（長顰翠眉に串ふ）

もある。名高い都にいる多くの生粋の美人たちは、もともと自分の器量を自慢に思っている。「蕩子」はでかけたままだ帰らぬ。「秋胡」のように他国に仕官し、いつ帰るか定まった期日もない。家に残された女性は、愛しい人の移り気を心配しながら、いたずらにやつれてゆくばかりである。この「蕩子」は「秋胡」と対になり、その心労のゆえに「妾薄命」の一篇となる。他国へ仕官中、他の女性に心変わりしたことが暗示されている。

以上のように、「蕩子」を解釈する際、「秋胡」のように他国に仕官し、女を泣かせる浮かれ男のイメージをもつことに留意しなければならない。女性の傍らにいる「蕭史」的な存在「蕭郎」は、「征怨」において、「蕩子」と対で用いられたことにより、遠征に出た「蕩子」のみならず、仕官に出て移り気になった「秋胡」のイメージをも併せもつようになったと考えられる。したがって、『新撰万葉集』の「蕭郎」が浮気な男になったのは、小島の指摘する平安当世の状況に合わせたという理由ばかりではなく、中国の「蕩子」を詠じた詩に影響されたというもう一つの理由を確実に指摘してよいと考える。

「征怨」は「蕭郎」と「蕩子」の関係性を明示し、『新撰万葉集』において、「蕭郎」と「蕩子」がセットになるヒントを与えた。そして、「代二秋胡婦一閨怨詩」では、「蕩子」が「秋胡」のように、心変わりした薄情な男として描かれている。かくて、『新撰万葉集』において、「蕩子」と対をなす「蕭郎」が、浮気な男として詠じられるようになったのではないだろうか。『新撰万葉集』（ア）（ウ）の漢詩が「蕭郎」の移り気を詠出したのは、主として、「征怨」をはじめとする中国の閨怨詩に由来すると筆者は考える。

五、「蕭郎」と馬

第二節でも述べたように、（イ）の漢詩の結句「願教蕭郎抂馬蹄」はとても示唆的な表現である。とりわけ、「抂馬蹄」という表現が重要だと考える。

『新撰万葉集』において、「蕭郎」と「馬蹄」との関連を示した用例

は他にも見いだされる。巻上の恋歌の第三首（通算百二番）の〈歌〉

鹿島成筑波之山之築築砥吾身一丹戀緒積鶴

（鹿島なる筑波の山のつくづくとわが身一つに恋を積みつる）

に添えられる〈詩〉、

馬蹄久絶不如何　（馬蹄久しく絶えて如何ともせず）

戀暮此山涙此河　（恋慕は此の山のごとく涙は此の河ごとし）

蕩客怨言常詐我　（蕩客の怨言常に我を詐き）

蕭君永去莫還家　（蕭君永に去りて家に還ること莫し）

において、「蕭君」は「蕭郎」に、「蕩客」は「蕩子」に等しく、女性の情夫を表している。第一句では、その馬蹄が音を鳴らしながらやって来ることがもはや途絶えた、と詠っている。

同じ恋歌の第十四首（通算百十三番）

都例無緒今者不戀砥念倍鞆心弱裳落涙歟

（つれなきを今は恋ひじと思へども心弱くも落つる涙か）

に配される〈詩〉

不枉馬蹄歳月抛　（馬蹄を枉げずして歳月を抛（なげうつ））

從休雁札望雲郊　（雁札休（や）しより雲郊を望む）

戀情忍處寧應耐　（恋情忍ぶる処寧んぞ応に耐ふべけんや）

落涙交横潤斗筲　（落涙交横して斗筲を潤す）

には、「蕭郎」（蕭君）の語は見えないが、第一句よりみて、蕭郎を詠じた詩であることことがわかる。

二首の「馬蹄」「永去莫還家」、「雁札」「落涙交横」をめぐる漢詩表現は中国の「昔昔鹽」のそれを想起させる。「昔昔鹽」は梁の楽府「夜夜曲」の別名であり、出征した夫「蕩子」を思う女性の情を叙すことを常とする。隋の薛道衡の「昔昔鹽」（『楽府詩集』第七十九巻）では、次のように詠う。

前年過代北　（前年　代北を過ぎ）

今歳往遼西　（今歳　遼西に往く）

一去無消息　（一たび去りて消息無く）

那能惜馬蹄　（那ぞ馬蹄を惜しまんや）

女性の愛する夫は出征し、前年は代北に立ち寄り、今年は遼西に行き、戦争で転々としている。別れてから、便りももらえず、なんで馬蹄を惜しんで帰って来られないのであろうか、と詠じている。これは「不枉馬蹄歳月抛」と極めて類似している。情夫が馬蹄をこちらに向けて、帰って来ないので、歳月がいたずらに経ってしまった怨みの情を訴えている。

これを晩唐の趙嘏（八〇六？～八五二）が大きく敷衍し、「昔昔鹽」二十章（『楽府詩集』第七十九巻）に仕立てている。その第十九首「一去無二還意一」詩に「良人征絶域、一去不言還（良人　絶域に征き、一たび去りて還るを言はず）」とある。はるか彼方の戦場に出かけて帰らないことは、「蕭君」の「永去莫還家」と状況が近似している。また、第十八首の「今歳往二遼西一」詩は「萬里飛書至（万里　飛書至る）」という句で始まり、「相望幾迢迢（相望めば迢迢たるに幾（ちらか）し）」ととという句で結んでいる。夫からの便りが途絶え、愛しい夫を思いな

がら、夫が遠征した遼西の方角を眺めやる。この句も「従休雁札望雲郊」の状況と類似する。また、第十一首の「蟠龍隨」鏡隱」詩に「雙涙落闌干（双涙落ちて闌干たる）」の句があり、涙がはらはら頬を伝うことを詠じているが、これも「落涙交横」と近似している。以上のように、『新撰万葉集』の〈歌〉に配された〈詩〉のなかには、閨怨詩の要素のみならず、辺塞詩の常套的表現もが取り入れられていることを確認できる。閨怨と辺塞は、中国古典詩歌においては、密接不可分なテーマであり、それらを融合させた詠作のパターンが早くから定着していた。[10] この点をも考慮に入れれば、『新撰万葉集』において、「蕭郎」と「馬蹄」とが結びついた〈詩〉の背景として、辺塞の要素を加味して理解することも、あながち不自然なこととは言えまい。

日本漢詩の中に、「蕭郎」と「馬蹄」とを同時に詠出した、看過できない作品がもう一つある。それは『和漢朗詠集』所収の「和二江侍郎来書一采女」である。この詩は「寒閨獨臥無夫聟、不妨蕭郎枉馬蹄（寒閨に独り臥して夫聟無し、妨げず蕭郎が馬蹄を枉げしむことを）」と詠じ、（イ）の〈詩〉と酷似している。「無夫聟」は（イ）の「希恩愛」にほぼ対応し、最後の一句はほぼ完全に同じである。ただし、右の「妨げず」という表現は「～して構わない」という意味なので、（イ）「願教」の「どうか～させてください」という切実な願望とはやや温度差があり、表現レベルではやや余裕のある言い回しであることも否めない。

上句の「夫聟」は「夫婿」に同じく、女性の夫を指し、「陌上桑行」（『古詩源』巻五）をはじめとする楽府系の詩にしばしば詠み込まれる。「陌上桑行」の「夫婿居上頭、何用識夫婿。白馬從驪駒、青絲繫馬尾（夫婿　上頭に居て、何ぞ用て夫婿を識らんや。白馬　驪駒に從ひて、青絲　馬尾に繫ぐ）」などに見られるように、馬を手にいれ、立身出世した「夫婿」の用例が有名である。馬は「夫婿」の身分の象徴であることがわかる。

よって、右の『和漢朗詠集』の「蕭郎」は出世した「夫聟」のことを指す。「夫聟」が出世のために出かけたので、私は寒い寝室で一人寝し、夫が馬蹄をまげて私のところに帰ってくれても構わない、と詠んでいる。

（イ）の〈詩〉の下二句に類似する熱い願望を扱った唐詩も存在する。それは盛唐・王昌齢（六九〇？～七五六？）「閨怨」（『王昌齢詩集』巻四）の「忽見陌頭楊柳色、悔教夫婿覓封侯（忽ち見る陌頭　楊柳の色、悔ゆらくは夫婿をして封侯を覓めしむを）」の句である。この「夫婿」は地位、名誉を求めるために、若き妻に尻を叩かれて、戦地に赴き、妻を家に残したと詠まれている。[11]「悔教」から、女性の後悔が詠じられた点が新しい。

以上、日中両国の漢詩にみえる「馬蹄」や「夫婿」の用例を検討してきたが、（イ）の〈詩〉の下二句「生前不幸希恩愛、願教蕭郎枉馬蹄」に立ち返ると、右の王昌齢詩の「悔教」句を、（イ）の〈詩〉は踏まえているのではないかと筆者は考える。後悔の念があったからこそ、「願教」という強い願望の語でもって、夫の帰りを待ちわびる切

実な気持ちを表現したのではないかと推察する。「蕭郎」が不在である理由として、従来指摘されてきた、心変わりのほかに、遠征のために長期不在であったという理由も挙げて良いのではなろうか。

馬に乗る「蕭郎」は必ずしも浮かれ男とは限らない。そこには、女性の夫に相応しい好青年「蕭史」を淵源とする「蕭郎」のイメージと、立身出世の象徴としての「蕭衍」に淵源をもつ「蕭郎」のイメージが重なって、「夫聟」の至福が表現されている。

（イ）の「蕭郎」について考察してきたが、引き続き「抂馬蹄」に注目する。「抂」は「枉」に通じ、木が大きくなって曲がる意から、まがる、まげるの意で用いられる。車騎をまげて回り道をする意で用いられた表現が、『史記』巻七十七「魏公子列伝」第十七にみえる。大梁の夷門（東の城門）の門番をしていた侯嬴が、魏の公子信陵君に対して、「願枉車騎過之（願はくは車騎を枉げて之に過れ）」といった。「古詩十九首」其十八「凜凜歳云暮」（『文選』巻二十九）に、「良人惟古歓、枉駕惠前綏（良人　古歓を惟ひ、駕を枉げて前綏を恵む）」の句がある。昔夫はわざわざ駕（乗り物、車）を私に向けて、「お乗り」といって取っ手の紐を授けて下さった。夫との楽しい昔を思い出して、私を訪ねてくれないかしらと心のどこかで願っている。

『新撰万葉集』はこれらの表現を基盤にして、「抂馬蹄」を案出したのではないだろうか。愛する夫がその乗り物に当たる馬の蹄の方向をこちらに向けて、帰ってきてほしいという思婦の思いを吐露している。

六、まとめ

『新撰万葉集』において、〈歌〉のなかで女性の恋慕の対象とされた男性は、〈詩〉においては「蕭郎」と具体的に表記されている。

中国古典詩歌の世界において、「蕭郎」は、特定の蕭某を指す意味から脱皮して、歴史上の「蕭衍」の文武両道のイメージや、伝説上の「蕭史」のイメージを包含しながら、しばしば詩人の自称や、風雅な友人をさしていう詩語として用いられるようになった。詩人自身や風雅な友人を「蕭郎」と称する以上、原則として「蕭郎」を浮気性の薄情な男として描くことは考えられない。女性の視点から詠まれた詩を精査してみても、「蕭郎」は、総じて心ときめく好青年として描写されている。

翻って、日本では、女性を悲しませる浮気性の薄情な男として「蕭郎」が〈詩〉に登場する。従来の通説では、奈良平安朝の漢詩は、『文選』を始めとする中国のモデルを忠実に踏襲する作例が多いというが、「蕭郎」の用例には日中の間でけっして無視できない異同が存在する。本稿で検討してきた内容を踏まえると、この異同を考える際、「蕩子」と「馬」がその鍵を握る。「征怨」は「蕩子」と「蕭郎」という組み合わせや、両者の深い関わりを暗示した。さらに、「代二秋胡婦一閨怨詩」では、「蕩子」が「秋胡」のように仕官先で心変わりしたことを詠じている。これら中国詩における先例を介して、『新撰万葉集』において、「蕩子」と対をなす「蕭郎」という、中国には見ら

れない性格を生み出したのではないかと考える。

「蕭郎」と「馬蹄」を共に詠じた日本漢詩は、中国の閨怨詩と辺塞詩を融合した「昔昔鹽」を想起させ、そこには、梁の武帝蕭衍の武のイメージが底流している。そして「蕭郎」が女性の元にいない理由はその移り気にあるというより、出征にあるのではないか、というもう一つの可能性を本稿で指摘した。

加えて、「狂馬蹄」という特徴的な表現も、中国詩にその原型を見出しうる。「古詩十九首」其十八「凜凜歳云暮」において、女性が夫に対して「枉駕」を用い、夫はわざわざ車を自分の方にまげたことを述べている。「狂馬蹄」は、愛しい夫が馬の蹄の方向をこちらに向け、帰ってきてほしいという願いを表出している。

本稿では、『新撰万葉集』にみえる「蕭郎」の特徴を考察し、その表現や語句の組み合わせを糸口にして、〈詩〉に織り込まれた複合的なイメージの分析を試みた。中国の伝統に基づきながらも、『新撰万葉集』の〈詩〉の作者が、新たな表現を追求していたことを、「蕭郎」の用例から垣間見ることができたのではないだろうか。

蕭史や蕭衍に象徴されるように、文であれ武であれ、社会的に成功を収めて、多くの麗しき女性の憧れの的となった「蕭郎」と、移り気で薄情なプレイボーイとしての「蕭郎」、一見すると好対照な性格を内包する両者ではあるが、日本と中国とで「蕭郎」の相異なる側面に着目した結果が用例の異同に繋がっているとも解釈できる。つまり、もっぱら「蕭郎」の光の部分に沿って詩語の展開を図った中国と、より多く「蕭郎」の影の部分に着目して詩語の定着を図った日本との相異である。ここには恋愛文化の異同が図らずも浮き彫りにされているかのようでもある。

注（1）　テキストは久曽神昇『新撰万葉集と研究』所載の増補本（流布本）により、寛文七年版本を底本にした『新撰万葉集注釈』、『対釈新撰万葉集』を参照。

（2）　小島憲之『古今集以前：詩と歌の交流』（塙書房、一九七六年二月）二八一頁を参照。

（3）　『梁書』「武帝紀」に、「竟陵王子良、開二西邸一招二文学高祖一與二沈約、謝朓、王融等一並遊焉」とみえ、梁の武帝蕭衍の文才が確認できる。その後に「王俊一見二梁武帝一、深相器異、謂二何憲一曰、此蕭郎三十内当レ作二侍中一、出レ此則貴不レ可レ言。」とある。蕭氏の息子である梁の武帝蕭衍は立身出世した粋な男性の象徴と見なされる。

（4）　「留別」は『全唐詩』巻八百六十三に所収、「與二蕭曠一冥會詩」は『全唐詩』巻八百六十六に所収。

（5）　「留別」という唐詩は『太平広記』（巻六八、女仙十三「封陟」出傳奇）にもみえる。その男主人公は封陟である。「蕭郎」は封陟を指す。仙姝が空より降下して、書生である封陟に恋愛関係を求めたが、封陟は学業のために仙姝を断った物語を記している。「織綃詩」は『太平広記』（巻三一一、神二十一「蕭曠」出傳奇）にも収載されている。「蕭郎」は蕭曠をいう。蕭曠と竜王の娘織綃女とが意気投合した奇遇を写している。一時的な出会いである以上、最後は別れるのも理にかなうことであろう。

（6）　中国古典文学に見える「蕭郎」について、小島憲之は『古今集以前：詩と歌の交流』（塙書房、一九七六年二月）において考察した。その二八九～二九七頁を参照。

（7）　小島憲之『古今集以前：詩と歌の交流』（注6所掲）二九七頁を参照。

（8）同上。

（9）『新撰万葉集注釈　巻上（一）』（和泉書院、二〇〇六年二月）三六一頁、朝比奈英夫による注を参照。

（10）松浦友久『中国詩歌原論』（大修館書店、一九八六年四月）所収の「『辺塞』と『閨怨』を結ぶもの」を参照。

（11）王昌齢による「閨怨」の表現を踏襲して、唐の詩人李頻は「春閨怨」という作品を記した。中に

自怨愁容長照鏡　（自ずから愁容を怨みて長く鏡に照らし）
悔教征戍覓封侯　（悔ゆるは征戍して封侯を覓めしむるを）

と詠じ、「征戍」で辺地に赴いた夫を描いた。王昌齢による「閨怨」にみえる「夫婿」も、戦地に赴いたのであろう。